

LEADERSHIP CHALLENGE

大隈塾LCレポート vol.06

大隈塾リーダーシップ・チャレンジは9月12日（土）13日（日）、ワークショップ「稲刈り」を行いました。

去年に引き続き、台風だったり大雨が続いて開催が危ぶまれました。会場となる鴨川自然王国（千葉県鴨川市）のスタッフと連絡を取り合いながら、どうにかゴーサイン。

当日はいい天気にも恵まれましたが、やはり田んぼは長雨でぬかるみ、場所によっては膝まで田んぼに足を突っ込んでの作業。まるで田植えのような稲刈りでした。

しかも、たわわに実った稲は、大風でなぎ倒されています。倒れた稲を刈るのは大変な作業です。倒れた方角に身体を向け、腰をかがめ、カマを使って稲を起こし、空いている方の手でその稲を掴み、刈る。一束刈ったら、それを握ったまま二束、そのまま三束と刈って、用意したコンテナ台の上に置く。同じ作業をしてX印になるように置く。X印で2回重ねたら、刈った刈目から15cmぐらいのところを「すがい縄」でしばる。すがい縄は、稲刈り作業前に自分たちで編んだものです。

ある程度刈って稲が倒れている方角が変わり、そうすれば身体も同じ方角に向け直し。つまり、田植えのようにまっすぐには進みません。自分で近未来の方角を計算しながら、手と足を動かしていきます。

こうして稲刈り作業は黙々と進み、乾燥させるために稲架（はざ）掛けにしていきます。

刈る、干す、脱穀、精米して、次回以降の授業のときに自分たちで育てたコメをお配りします。ご家庭で召し上がっていただきたいです。

2日目は畑仕事。第1農場、第2農場と点在する畑までの山中散策。そして生姜、ピーマン、明日葉の収穫。明日葉はもいでその場で食べたり、細く切って揉んで粘りを出して、昼食のカレーに混ぜて食べました。

なお今回も田植えと同様、学部（早稲田大学）の大隈塾ゼミ生、ゼミOGOB生と一緒に作業をしました。隣り合った世代ではありますが世代を超えて、「大隈塾生」として活動し、親睦を深めることが出来ました。



【受講生のレポートより】

昨年刈った稲から藁がで、その藁を編んで「すがい縄（稲を束ねるための縄）」をつくる。すばい縄で今年の稲を束ねる。あるいは昨年のショウガを種にして今年のショウガができる。年を経るにつれて土が肥えてくる。といったサイクルに「自然」を感じた。都会の生活ではこういう当たり前の「自然」をなかなか感じることができず、自然の本来の姿を知ることができない。こういうサイクルを知って生活をしていたら、もっと自然と調和したライフスタイルを構築でき、もっと自然を守っていけるような気がした。

=====

最新設備は一切使用しないで作業できる「先人の知恵」に大きく感心した。たとえばくすがい縄（稲を束ねるための縄）>完成したのを見ると複雑で作るのが大変そうに見えるが、教わったやり方をすれば、簡単にできてしまう。そして稲を縛ると見事にズレない。コツを教わりやるとできるが、あの知恵を生み出した先人に感心。そしてくビニール紐>・・・長靴に巻く、腰に巻く、すがい縄を腰にまとめる、活用方法がシンプルだけ実用的。ぼんやりですが、最新インフラ・ツールを導入するだけでなく、既存のリソースを上手く使うだけで解決できることが実務でもあるのでは！？と考えさせられました。

=====

この歳になると、4か月間はあっという間であるが、その間に稲ができてしまうという事実に自然の恵みや力強さを実感しました。稲刈りは体力的にもつらくなく、楽しんで実施できました。余暇の楽しみとして半農を取り入れることも長い目で考えたいと思います。

=====

普段の都会生活の中でふと田舎生活への憧れを感じることもあるが、実際の都会暮らしの便利さに慣れてしまっている現状の生活から、実際に移住ということについて恐らく踏み込むことは難しいとも感じた。このような体験は、子供時代から定期的に体感できるような機会があれば、自然、都会の暮らしのそれぞれの良さ／悪さそれぞれについて理解を深めることができるのではと感じた。次の世代である自身の子供にも、意識的にこのような体験の機会を与えていきたい。

=====

田植え稲刈りも通常の生活では経験できませんが、学生とこれだけ長時間過ごすことも、通常ありません。学生が社会人から影響を受けると思いがちですが、大隈塾の学生から学ぶことも多いと思います。飲み会で「安保」の話をしている学生vs酔っ払って歌っている大人たちとても面白い風景でした。

=====

バーベキューの後の学生たちが自分の将来や日本の将来のことなど、稚拙かもしれないが、真剣に考えて議論している様子を見て、最近、あまり仕事や家庭のこと以外で真剣に考えたり、議論

したりしていないことに気付いた。社会人になってから目の前のことばかりを考えがちで、どんどん視野が狭くなり、頭が固くなっているような気がした。

=====

自社の事業観点からは、農業分野においてはインターネットの普及による生産者と消費者のダイレクトビジネスや、道の駅やJAによる従来流通を経由しないビジネスが拡張しており、ビジネスチャンスがあること、そして生産者の発育管理(温度や湿度、天候や水分量、各種栄養素、他)をITを活用することで全体最適化す運用が各社で始まっていますが、その現場であり大元である生産者の「生産」に少しでも関与できたことはよい経験となりました。

=====

生姜を収穫したとき、あまりの香りのよさに驚いた。また、そのまま食べたとき、あまりにも瑞々しくて味が濃く、再び驚いた。普段食べているものは生産地から直接届いているわけではないことを改めて感じた。消費者は「野菜を選ぶ」のではなく、「旬の野菜を、できるだけ新鮮なうちに食べる」方が身体にいいと思うし、生産者にもいいと思う。

=====

農体験を通して伺った獣害の話、自然と共存しながら作物を育てる為の工夫の話などを通じて、いつでも好きな時に好きな食べ物（特に生鮮食品）を手に入れることのできる日常生活の仕組みに対して、人間の知恵の凄さを感じると共にどこかに無理が生じているに違いないという違和感も覚えました。今回、このような機会を与えて頂き、頭で理解するだけではなく体で感じることで、しっかりと記憶に刻まれたような感覚があります。大変貴重な機会を頂き、ありがとうございました。

=====

会社や日本政府も「働き方改革」や「生産性向上」といった流れの中、稲刈り機が入れば、おそらく数分で終わる作業を、ぬかるみや蛇の恐怖と戦いながら、2.5時間掛けて人の手でやる意味は何だろう、と考えました。一方、想定以上の雨天が続いたことによって生じた土地の状態からすれば、稲刈り機を使うことはそもそも不可能だったとも思え、そういった状況の際に、人の手でのやり方の技術を伝承していく（及びコンテナを使う創意工夫など）ことも重要なんだと感じました。

=====

稲で縄を編んだり、稲刈りしたり、山の中を歩いたり、畑の中に入ったり、景色を眺めていると、同じ日本ではないような、別世界にいるような感覚で、古き良き時代にタイムスリップしたような感じがしました。あらためて人間は自然に生かされていて、自然、食（食物を育てている方々を含めて）がなければ生きてはいけないということをしみじみと感じました。

=====

生姜の収穫の際に伺った土を育てることと地主さんとのやり取りの話は、非常に興味深く拝聴できた。必ずしもよい土を育てることが一つの答えではなく、地主さんとのやり取りの中で、自分の落としどころを決めることは、我々の日頃のビジネスでも必要で共通だと感じた。



大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.06

2015年9月30日発行（通算17号）

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 mura@ta2.so-net.ne.jp

169-0051 東京都新宿区西早稲田1-9-19 アーバンヒルズ早稲田207

tel:050-3558-7527 mail:ookuma_school@stonesoup.tokyo